

# 西光

第9号

百橋山 西光 寺  
高岡市京町一〇一二五  
電話(〇七六六)二二二九七  
FAX(〇七六六)二二二二七〇  
平成七年九月十五日

## 我が家の宗教

今年一月から十月までの半年あまりの間に、何年かにわたって起こったであろうような、衝撃的な事件が次々と発生した。しかも戦後五十年を経た現在の日本と日本人のあり方を考える上できわめて象徴的な事件であった。まず一月十七日に起こった未曾有の災害である阪神大震災である。大正十二年に起こった関東大震災以来の大規模な地震であり、まず地震はないといわれていた関西地区、しかも人口の密集する大都市である神戸の直下で起こった、考えられない突然の災害は、多くの家屋を倒壊させ、また劫火が迫り、約六千人の人が瞬時に犠牲となった。また難を逃れた人々には生活の場を奪われた苦難の日々が待っていた。私もあの時は京都にいて未明の真つ暗な中で、ガス爆発を思わせる突然の縦揺れに、それから続いた横揺れは、これまで全く経験のしたことのない激しいものであった。幸い棚の上のものが少し落ちただけで大きな被害はなかった。その後早朝にもかかわらず、各方面からの安否の電話がかかり、またこちらからも神戸方面へかけたが、やがて電話はつながらなくなった。高岡へも門徒各位から私を心配した電話があったと後で知らされた。まことに有り難いことでありました。しかしテレビは次第に神戸の悲惨な状況を伝えはじめた。だか交通機関は寸断され、どうにもならなかった。神戸の学生のこと、また神戸方面の門徒の方の消息など気になって一日中テレビを見ながら、救援のものを用意した。実は私もあの日は神戸へ行くことになっていたのである。もしあの地震が昼間に起こっていたならば、どうなっていたかわからないのである。翌日から電車が途中の西宮までは運行するというので、リュックを背負って歩いて行くことにした。しかし阪神間の状況は悲惨を極めた。家々は無惨にもゴミくずのように押しつぶされて破壊され、電柱は倒れ、道路は歪み、また翌々日の三日目になって未だに延焼する火災の炎や煙が立ち上り、想像を絶する光景は延々と続き、この世の地獄かと思われた。片道四時間ほどかけてようやく大学にまでたどり着いた。幸い神戸の学生もまた門徒の方も無事であった。途中はリュックを背負って家族で手を引きながら避難する人と、これまたリュックを背負って救援に向かう人とが行き交い、さながら戦時の混乱期のような状態であった。しかしこの降って湧いた突然の災害にもかかわらず、家族や近所の人々は互いに助け合って救助に当たっていた。ことに生命の危機が迫ったとき、もっとも身近にいる人がわれを忘れて人の命を気遣い、そして遠くにいる親族が素早く救助に立ち上がったのである。さらに縁もゆかりもない多くの人々が、日本中からも、世界各地から、ボランティアとして、あるいは義捐金という形で救援の手をさしのべた。災害時にありがちな混乱や暴動もなく、世界中から心温まる支援と賞賛が寄せられた。人間の力ではどうにもならない一瞬の無情の災害による、人間の命の尊さと、はかなさとを知らしめられ、しかしなお人間としての尊厳を失うことなく、そこに家族や近隣のご縁と人情のありがたさと力強さを示したものと見える。誰一人身の不運を嘆くことなく、肅々と毅然として自己に与えられた苦難に立ち向かう姿は本当に見事であった。仏教が従前から繰り返し説いてきたように、善悪を越えて、また時を選ばず、無常の風の前に娑婆の業縁が尽き時、如何なる人も、自らの力ではどうすることもできず、ただそのような孤独で非力な悲しい人間こそが、仏の慈悲の力にすがってのみ救われるのであると。神戸の人々が黙々と耐えながら、みんな犠牲になった人に手を合わせ、また生ある限り、家族・近隣の人々が互いに命ある喜びに感謝する姿に、未だ失われていない日本人の深い宗教的な心情が感じられた。

一方三月に起きた地下鉄サリン事件など一連のオウム真理教をめぐる驚愕すべき非道な事件は、これまた現在の日本の、ことに若者がおかれた精神状況を反映したものである。オウム真理教の教祖と称する一人が達成したとする最終解脱(一)に、不可解な超能力と俗世間を離れた修行とによって同様の精神状態に向上できるといふことらしいが、遺憾なことに人間にはそのような格別の力はない。にもかかわらず自分たちのみが特殊な能力や秘儀的な儀式によって獲得したとすることから、彼らは傲慢で独善的な教義の道に陥っていったものと思われる。この程度であれば、秘密の効験や特殊な御利益を吹聴する現代の新興宗教の多くがそうであるように、自分たちだけが特別なお告げや能力を持つといった教

義と、それに惹かれて多額の上納金を差し出す蒙昧な信者群の集団とさして違いはなかった。そして受験競争にきわめて優秀な成績で、順調に与えられた道を進んできた若者は、集団に帰属して決められた範囲の中を、周囲の期待にそって行動する、いわば優等生にとつてエリートとして選ばれたという意識の過剰な反面、一方で日の当たる枠の中にとどまってしまう生きたらぬという、一人の人間としての自立できない寂しさと孤独感を味わっている。オウムはこのようなエリートの若者に接近し、家庭や受験勉強や大学では得られない、超能力だの、解脱だのといったありもしないコミックな理想によって幻惑させていったのであろう。根がまじめで、自意識過剰な若者にとつていかにも理屈っぽいオウム教義の背後に、人間の無常なる姿も見えず、家族や親しい友人や近所の人とのご縁を喜び感謝することもなく、また人間の力を越えた慈悲の世界からの呼び声に耳を貸す人は少なかつたようである。しかしその後オウムの場合、それまで吸い上げた莫大な「布施」をもとに、政治を指向し選挙に破れ、やがて権力や現在の政治的な状況への欲求不満を、毒ガスや銃器を製造し、無差別殺人に走り、また人を拉致監禁したり、リンチしては殺害するといった非道な方向へと突き進んで行った。自分たちの思う方向が受け入れられないとした瞬間から、邪魔な人は殺害しても排除してよいとするともない教義を作り上げたのである。内なる精神の修養が行き詰まったとき、外の世界の破壊に向かうとは、とても宗教の名に値しない。人間性を麻痺させた、いわゆる邪教である。大乘仏教で説く菩薩の道は、自らを宿業の世界からどうすることもできず苦悩し、苦しみを続ける人間を、いつ如何なる境遇にあろうとも、すべての人が平等に救われるまで救済を続ける慈悲の大道である。これまでの日本のほとんどの家庭では仏壇があり、朝晩に年寄りが主となって大切にお守りし、共に仏壇を中心に生活を送ってきた。朝にはまず仏壇に仏飯を供え、学校を卒業したといつては卒業証書を仏壇に飾り、また娘が嫁に行くといつてはその家の仏壇に別れを告げ、また年寄りが亡くなったといつては家族・親戚が寄り添い、みんなで仏壇に手を合わせて見送った。その長年の生活習慣の中で、人間にはどうしても越えられないものごとがあり、またそんな中で日々家族がそろって元気に生きていくことがどのようなかであるかを自然に身につけてきた。喜びも悲しみも、家族みんなで共感し、時と共に流れる人間の移ろいの中に人間は一人として孤立して存在するものではなく、長い縁起の歴史と大自然の中に今日があることを自覚し、自然と手を合わせる心情を育んでいったのである。家々には立派な宗教が脈々と息づいていたのである。すなわち家庭では仏壇が見守ってくださっていたのである。ところがどうしたのであろうか。一方の神戸では多くの若者が無償のボランティアに全国から駆けつけて身を粉にして働く姿は感動をもって賞賛され、一方のオウムでは独善と思いがかりから多くの人を殺害しても何の精神的な苦痛さを感じない心のすさんだ愚かな若者がいる。いずれも戦後五十年を迎え、高度経済成長も峠を越えた現代日本の精神状況なのである。

## 「標語」

「常照我身」というのは、常はつねにという。照はてらしたまうという。無碍の光明、信心の人の心をつねにてらしたまうとなり。つねにてらすというは、つねにまもりたまうとなり。我身は、わがみを大慈大悲ものうきことなくして、つねにまもりたまうとおもえとなり。撰取不捨の御めぐみのところをあらわしたまうなり。「念仏衆生 撰取不捨」のこころを積したまえるなりとしるべし。『尊号真像銘文』

## 「真宗ひとこと知識」 彼岸

「彼岸」はサンスクリット語のパラミター(波羅密)、すなわち「到彼岸」に由来するという。生死の苦しみにさいなまれる煩悩の世界である此岸を離れて、涅槃の世界である彼岸に到達するという仏教の教えが彼岸の行事を生み出すもととなった。浄土思想では、阿彌陀の浄土である極楽世界にいたった状態が「到彼岸」と解される。「観無量寿経」に説かれる十六の観法の一つに、日没の方向に極楽浄土を想定して、浄土に生まれることを願う、日想観があるが、唐の善導大師はその著書で、太陽が真西に沈む春分・秋分の日の日没時にこの日想観を修することを勧めた。

## 「お知らせ」

平成八年一月十日から三月九日まで、文部省の在外研修のため米国・欧州に参りますので、その間不在になります。その間の行事そのほかについては支障のないように手配してありますので、一時の不便をご寛恕ください。